

1 課

虐げられても見捨てられず

口語訳: 迫害に会っても見捨てられない(Ⅱコリ4:9参照)

1月3日

安息日午後

12月27日

暗証聖句

あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。(ピリピ 4:4、口語訳)

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。(フィリピ 4:4、新共同訳)

今週の聖句

エフェソ(エペソ)3:1、Ⅱコリント 4:7~12、使徒言行録(使徒行伝)9:16、
フィレモン(ピレモン)15、16、コロサイ 4:9、フィリピ(ピリビ)1:1~3、コロサイ 1:1、2

今週のテーマ

あるアドベンチストの牧師が冤罪で投獄され、2年近く獄中で過ごしました。最初は非常に当惑しましたが、彼は、刑務所が神から与えられた宣教の場であることに気づきました。彼が牧師であることを知った仲間の囚人たちは、説教をするように頼んできたのです。彼は説教し、文書も配りました。囚人たちにバプテスマを授け、聖餐式も執り行いました。「しばしば、獄中で奉仕をするのは大変でした。しかし、祈りが応えられたり、人生が変えられたりするのを見たときは、特に喜びがありました」と、彼は語っています。

パウロは、フィリピの信徒への手紙(ピリピンへの手紙)とコロサイの信徒への手紙(コロサイ人への手紙)を[ローマの]獄中から書き送りました(フィリ[ピリ]1:7、コロ4:3参照)。実際、フィリピ(ピリビ)において、パウロとシラスは不当に告発され、その後、看守が「(彼らの)足には木の足枷をはめておいた」[口語訳「その足に足かせをしっかりとかけておいた」](使徒16:24)のでした。「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」[口語訳「真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいっていた」](同16:25)とあります。本当に彼らは、「いつも(常に)喜んでいる」方法を知っていたのです。

今週、私たちは、パウロが直面した状況について見ていきます。パウロは、自分の身に起こったことに、もっと大きな目的があると見いだしました。私たちも、避けがたい試練に直面するとき、彼から学ぶことができます。

フィリ 1:7 (新共同訳)

1:7 わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思って、心に留めているからです。

コロ 4:3 (新共同訳)

4:3 同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように。このために、わたしは牢につながれています。

使徒 16:24、25 (新共同訳)

16:24 この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。

ピリ 1:7 (口語訳)

1:7 わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。

コロ 4:3 (口語訳)

4:3 同時にわたしたちのためにも、神が御言のために門を開いて下さって、わたしたちがキリストの奥義を語れるように（わたしは、実は、そのために獄につながれているのである）、

使徒 16:24、25 (口語訳)

16:24 獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかりとかけておいた。

16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいっていた。

日曜日 12月28日 イエス・キリストの囚人、パウロ

フィリピの信徒への手紙(ピリピ人への手紙)とコロサイの信徒への手紙(コロサイ人への手紙)は、パウロが獄中にいたときに書かれたため、獄中書簡と呼ばれています(ほかには、エフェソの信徒への手紙[エペソ人への手紙]とフィレモンへの手紙[ピレモンへの手紙])。多くの注解者は、パウロがローマにいた西暦60～62年頃に、これらの手紙が書かれたと考えています(使徒28:16参照)。

問1 エフェソ(エペソ) 3:1 とフィレモンへの手紙(ピレモンへの手紙) 1 節を読んでください。投獄されたことへのパウロの捉え方には、どのような意味がありますか。

パウロは、イエス・キリストへの奉仕のために生涯をささげました。囚人になることがその奉仕に含まれるのであれば、彼はそれも覚悟していました。パウロは自分自身を、「鎖につながれた使者(口語訳:使節)」(エフェ[エペ]6:20、英訳 *an ambassador in chains*)と表現しています。彼は宣教旅行に出かけ、教会を立ち上げ、主のために働き人を訓練してきました。彼は、「なぜ自分はここにいるのだろうか。この鎖がなければ、もっと多くのことができるのに」と自問したかもしれません。パウロはのちに、牧会書簡とされている、II テモテへの手紙を書いたときも獄中にいました。つまり、少なくとも新約聖書の中の五つの書は、彼が獄中にいたときに書かれたのです。

獄中書簡のいずれも、パウロが投獄された場所について具体的に言及していません。そのため、エフェソ(エペソ)かカイサリア(カイザリヤ)ではないかと示唆する人たちもいます。しかし、パウロがエフェソ(エペソ)で投獄されたという聖書の証拠はありません。カイサリア(カイザリヤ)のほうが可能性は高いように思われますが、そこでは、彼の命に明らかな脅威はありませんでした。しかし、フィリピの信徒への手紙(ピリピ人への手紙)が書かれた頃には、そのような脅威が確かにありました(フィリ[ピリ]1:20、2:17参照)。

この書簡は、パウロが投獄されたとき、どこにいたかについて、いくつかの手がかりを与えてくれます。まず、そこには「プライトーリオン」がありました。これは、イエスがピラトに尋問されたエルサレム(マタ27:27、ヨハ18:33)や、パウロが投獄されたカイサリア(カイザリヤ)(使徒23:35)のような、地方総督の官邸を指している可能性があります。しかし、パウロはこの用語を場所ではなく、人々について用いています。彼は、「近衛兵全員」(フィリ[ピリ]1:13、英訳“the whole palace guard”)(新共同訳・口語訳共に「兵営全体」)に福音が知れ渡ったと述べているのです。ローマにおいてそのような人々は、皇帝を守り、囚人を監視する、1万4000人にもおよぶエリート兵士でした。

第二に、パウロはまた、信者である「皇帝の家の人たち」[口語訳「カイザルの家の者たち」](フィリ[ピリ]4:22)からの挨拶を送っています。これは、パウロがローマで囚われの身であり、皇帝の家に仕える人たちと接触していたことを示しています。

【参考】英語テキストにある文

How do we learn to make the best of whatever tough situation we find ourselves in? Why is that not always easy to do?

苦しい状況に陥った時、どうすれば最善を尽くす方法を学べるのでしょうか。なぜそれが必ずしも容易ではないのでしょうか。

5

使徒 28:16 (新共同訳)

28:16 わたしたちがローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された。

エフェ 3:1 (新共同訳)

3:1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているわたしパウロは……。

フィレ 1 (新共同訳)

1 キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、わたしたちの愛する協力者フィレモン、

エフェ 6:20 (新共同訳)

6:20 わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語る

使徒 28:16 (口語訳)

28:16 わたしたちがローマに着いた後、パウロは、ひとりの番兵をつけられ、ひとりで住むことを許された。

エペ 3:1 (口語訳)

3:1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ——

ピレ 1 (口語訳)

1 キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、わたしたちの愛する同労者ピレモン、

エペ 6:20 (口語訳)

6:20 わたしはこの福音のための使節であり、そして鎖につながれているのであ

べきことは大胆に話せるように、祈ってください。

フィリ 1:20 (新共同訳)

1:20 そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願ひ、希望しています。

フィリ 2:17 (新共同訳)

2:17 更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。

マタ 27:27 (新共同訳)

27:27 それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。

ヨハ 18:33 (新共同訳)

18:33 そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。

使徒 23:35 (新共同訳)

23:35「お前を告発する者たちが到着してから、尋問することにする」と言った。そして、ヘロデの官邸にパウロを留置しておくように命じた。

フィリ 1:13 (新共同訳)

1:13 つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、

フィリ 4:22 (新共同訳)

4:22 すべての聖なる者たちから、特に皇帝の家の人たちからよろしくとのことです。

るが、つながれていても、語るべき時には大胆に語れるように祈ってほしい。

ピリ 1:20 (口語訳)

1:20 そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。

ピリ 2:17 (口語訳)

2:17 そして、たとい、あなたがたの信仰の供え物をささげる祭壇に、わたしの血をそそぐことがあっても、わたしは喜ぼう。あなたがた一同と共に喜ぼう。

マタ 27:27 (口語訳)

27:27 それから総督の兵士たちは、イエスを官邸に連れて行って、全部隊をイエスのまわりに集めた。

ヨハ 18:33 (口語訳)

18:33 さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。

使徒 23:35 (口語訳)

23:35「訴え人たちがきた時に、おまえを調べることにする」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

ピリ 1:13 (口語訳)

1:13 すなわち、わたしが獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかになり、

ピリ 4:22 (口語訳)

4:22 すべての聖徒たちから、特にカイザルの家の者たちから、よろしく。

月曜日 12月29日 鎖につながれたパウロ

マケドニア州(マケドニヤ)に滞在中、パウロは何度も投獄されたと述べています(Ⅱコリ6:5、11:23、7:5)。最初に記録されているのは、フィリピ(ピリピ)での投獄です(使徒16:16~24)。その後、エルサレムで短期間投獄され、次にカイサリア(カイザリヤ)の牢獄に移送されました。

ほかの箇所でもパウロは、「監禁されてい(た)」[口語訳「**捕らわれてい(た)**」](フィレ[**ピレ**]10,13)と述べています。ローマでは、自宅で軟禁されていましたが、彼はエリートのローマ兵士と鎖でつながれていました。同じように鎖でつながれた2世紀初頭のキリスト教徒イグナティウスは、兵士たちが「野獣のようであり、……彼らは人々から親切を受けてもますます悪くなるばかりだ」(マイケル・W・ホームズ編『使徒教父』231ページ、英文)と述べています。

問2 IIコリント 4:7～12 を読んでください。この箇所から、パウロが直面した試練をいかにして耐えることができたのか、何がわかりますか。彼の人生の中心は、何だったと思われますか。

人生がいかに困難になっても、パウロは明るい面を見ることができ、それが重圧に耐える勇気を彼に与えたのです。サタンがありとあらゆるものを投げつけてきたにもかかわらず、パウロは、自分が見捨てられていないことを知っていました。

問3 IIコリント 6:3～7 を読んでください。パウロは、このような困難に立ち向かうために、どのような霊的な助けを得ていたでしょうか。

私たちは、自分の状況、弱点、過去の失敗を見て、落胆してしまうことがあります。そのような時こそ、私たちが悪と戦って勝利できるように神が用意されているすばらしいものを思い出す必要があります。最も重要なものの一つは、「真理の言葉」である聖書です。聖書を通して、他人の失敗や彼らがどのように勝利したかを学ぶことができます。また、「世のあがない主によって達成されたことに効果を与えるのは御霊である。……御霊によって、信者は神の性質にあずかる者となる。すべての先天的後天的な悪の傾向に打ち勝つ天来の力として、またご自身の品性を教会に印象づける天来の力として、キリストは御霊をお与えになった」(『希望への光』1029ページ、『各時代の希望』第73章)。

【参考】英語テキストにある文

How can we, as laity or as clergy, always “commend ourselves as ministers of God” (2 Cor. 6:4, NKJV)? What does that mean?

私たちは、信徒として、あるいは聖職者として、どのようにして常に「神に仕える者としてその実を示(す)」[口語訳「神の僕として、自分を人々にあらわ(す)」](IIコリ 6:4) ことができるでしょうか。それはどういう意味でしょうか。

IIコリ 6:5 (新共同訳)
6:5 鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、

IIコリ 6:5 (口語訳)
6:5 むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、

Ⅱコリ 11:23 (新共同訳)

11:23 キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。

Ⅱコリ 7:5 (新共同訳)

7:5 マケドニア州に着いたとき、わたしたちの身には全く安らぎがなく、ことごとくに苦しんでいました。外には戦い、内には恐れがあったのです。

使徒 16:16~24 (新共同訳)

16:16 わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。

16:17 彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」

16:18 彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。

16:19 ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。

16:20 そして、二人を高官たちに引き渡し、こう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。」

16:21 ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」

16:22 群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。

16:23 そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。

Ⅱコリ 11:23 (口語訳)

11:23 彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである。苦勞したことはもっと多く、投獄されたことももっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった。

Ⅱコリ 7:5 (口語訳)

7:5 さて、マケドニアに着いたとき、わたしたちの身に少しの休みもなく、さまざまの患難に会い、外には戦い、内には恐れがあった。

使徒 16:16~24 (口語訳)

16:16 ある時、わたしたちが、祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女奴隷に出会った。彼女は占いをして、その主人たちに多くの利益を得させていた者である。

16:17 この女が、パウロやわたしたちのあとを追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救いの道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。

16:18 そして、そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その霊にむかい「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行った。

16:19 彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶えたのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行った。

16:20 それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、

16:21 わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです。」

16:22 群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じた。

16:23 それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。

16:24 この命令を受けた看守は、二人を
いちばん奥の牢に入れて、足には木の足
枷をはめておいた。

フィレ 10、13 （新共同訳）

10 監禁中にもうけたわたしの子オネシ
モのことで、頼みがあるのです。

13 本当は、わたしのもとに引き止めて、
福音のゆえに監禁されている間、あなた
の代わりに仕えてもらってもよいと思っ
たのですが、

Ⅱコリ 4:7～12 （新共同訳）

4:7 捕われの身で産んだわたしの子供オ
ネシモについて、あなたに願います。

4:8 わたしたちは、四方から苦しめられ
ても行き詰まらず、途方に暮れても失望
せず、

4:9 虐げられても見捨てられず、打ち倒
されても滅ぼされない。

4:10 わたしたちは、いつもイエスの死を
体にとっています、イエスの命がこの
体に現れるために。

4:11 わたしたちは生きている間、絶えず
イエスのために死にさらされています、
死ぬはずのこの身にイエスの命が現れる
ために。

4:12 こうして、わたしたちの内には死が
働き、あなたがたの内には命が働いてい
ることになります。

Ⅱコリ 6:3～7 （新共同訳）

6:3 わたしたちはこの奉仕の務めが非難
されないように、どんな事にも人に罪の
機会を与えず、

6:4 あらゆる場合に神に仕える者として
その実を示しています。大いなる忍耐を
もって、苦難、欠乏、行き詰まり、

6:5 鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢
餓においても、

6:6 純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽り
のない愛、

6:7 真理の言葉、神の力によってそうし
ています。左右の手に義の武器を持ち、

16:24 獄吏はこの敵命を受けたので、ふ
たたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせ
をしっかりとかけておいた。

ピレ 10、13 （口語訳）

10 捕われの身で産んだわたしの子供オ
ネシモについて、あなたに願います。

13 わたしは彼を身近に引きとめておい
て、わたしが福音のために捕われている
間、あなたに代って仕えてもらいたかつ
たのである。

Ⅱコリ 4:7～12 （口語訳）

4:7 しかしわたしたちは、この宝を土の
器の中に持っている。その測り知れない
力は神のものであって、わたしたちから
出たものでないことが、あらわれるため
である。

4:8 わたしたちは、四方から患難を受け
ても窮しない。途方にくれても行き詰ま
らない。

4:9 迫害に会っても見捨てられない。倒
されても滅びない。

4:10 いつもイエスの死をこの身に負う
ている。それはまた、イエスのいのちが、
この身に現れるためである。

4:11 わたしたち生きている者は、イエス
のために絶えず死に渡されているのであ
る。それはイエスのいのちが、わたした
ちの死ぬべき肉体に現れるためである。

4:12 こうして、死はわたしたちのうちに
働き、いのちはあなたがたのうちに働く
のである。

Ⅱコリ 6:3～7 （口語訳）

6:3 この務がそしりを招かないために、
わたしたちはどんな事にも、人につまづ
きを与えないようにし、

6:4 かえって、あらゆる場合に、神の僕と
して、自分を人々にあらわしている。す
なわち、極度の忍苦にも、患難にも、危
機にも、行き詰まりにも、

6:5 むち打たれることにも、入獄にも、騷
乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、

6:6 真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と
偽りのない愛と、

6:7 真理の言葉と神の力とにより、左右
に持っている義の武器により、

パウロの第二次伝道旅行中、テモテがチームに加わって間もなく、彼らは聖霊によって小アジアを縦断することを禁じられました(使徒16:6)。するとパウロは、夜の幻の中で、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」〔口語訳「マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」〕(使徒16:9)と懇願する男を見ました。そこで、彼らはすぐにマケドニア州(マケドニア)に最も近い港に向かい、トロアスからエーゲ海を渡ってヨーロッパ大陸のネアポリスに向かいました。しかし、そこで伝道することなく、パウロ、シラス、テモテ、そして(使徒16:11の「わたしたち」という言葉からわかるように)トロアスで合流したルカたち一行は、フィリピ(ピリピ)に向かいました。

伝道活動において、パウロは常に戦略的に考えていました。フィリピ(ピリピ)は、マケドニア州第一区の都市〔口語訳「マケドニアのこの地方第一の町」〕(使徒16:12)でした。実際、フィリピ(ピリピ)はローマ帝国の最も名誉ある都市の一つで、「イウス・イタリクム」(都市に与えられる最高の称号)の地位を与えられていました。その市民は、地租や人頭税の免除など、イタリアの都市と同じ特権を持ち、この都市で生まれた人は、自動的にローマ市民になりました。またフィリピ(ピリピ)は、ローマと東方を結ぶ主要な陸路であるエグナティア街道沿いの重要な中継地でもありました。そこに重要なキリスト教徒の拠点を確立することで、彼らはアンフィポリス(アムピポリス)、アポロニア(アポロニヤ)、テサロニケ、ベレア(ベレヤ)など、近隣の多くの都市に福音を伝えることができたのです(同17:1, 10参照)。

興味深いことに、1世紀のフィリピ(ピリピ)の公用語はラテン語でした。このことは、ラテン語の碑文が圧倒的に多く見つかったことから明らかです。フィリピ(ピリピ)4:15でパウロは、「フィリッペンシオイ」というラテン語風の名前でフィリピ(ピリピ)の信徒に〔「フィリピの人たち」「ピリピの人たちよ」と〕呼びかけ、彼らのローマ市民としての特別な地位を認めているようです。とはいえ、ギリシア語は市場や、フィリピ(ピリピ)周辺の町や都市では使われ、福音を広めるために用いられました。ルカは、パウロの一行が川岸で人々と一緒に祈り、そこでリディア(ルデヤ)とその家族が改宗した様子を記しています(使徒16:13~15)。彼女は実業家(「紫布を商う人(紫布の商人)」)であり、フィリピ(ピリピ)におけるパウロの宣教活動の主要な資金提供者の1人だったでしょう。パウロとシラスがフィリピ(ピリピ)の牢で過ごしたことは、別の(看守の)家族全員の改宗につながりました。

聖霊は、迫害があるにもかかわらず、フィリピ(ピリピ)がヨーロッパ全土に福音を広める理想的な足場となることを知っておられました。迫害は、どれほどひどいものであったとしても、状況によっては、その迫害がなければ福音を届けられない可能性のある人々に福音を届けられるきっかけになるのです。

使徒言行録9:16を読んでください。この聖句は、パウロのいくつかの試練を理解するうえで、いかに役立ちますか。また、それは、私たち自身の試練を理解するうえで、いかに助けとなるでしょうか。

7

使徒 16:6～12 （新共同訳）

16:6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。

16:7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。

16:8 それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。

16:9 その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。

16:10 パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

16:11 わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、

16:12 そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。

使徒 17:1、10 （新共同訳）

17:1 パウロとシラスは、アンフィポリスとアポロニアを経てテサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂があった。

17:10 兄弟たちは、直ちに夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこへ到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。

フィリ 4:15 （新共同訳）

4:15 フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおおり、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかにも一つありませんでした。

使徒 16:13～15 （新共同訳）

16:13 安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そし

使徒 16:6～12 （口語訳）

16:6 それから彼らは、アジアで御言を語ることを聖霊に禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤ地方をとおって行った。

16:7 そして、ムシヤのあたりにきてから、ビティニアに進んで行こうとしたところ、イエスの御霊がこれを許さなかった。

16:8 それで、ムシヤを通過して、トロアスに下って行った。

16:9 ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニア人が立って、「マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」と、彼に懇願するのであった。

16:10 パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニアに渡って行くことにした。

16:11 そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。

16:12 そこからピリピへ行った。これはマケドニアのこの地方第一の町で、植民都市であった。わたしたちは、この町に数日間滞在した。

使徒 17:1、10 （口語訳）

17:1 一行は、アムピポリスとアポロニヤをとおって、テサロニケに行った。ここにはユダヤ人の会堂があった。

17:10 そこで、兄弟たちはただちに、パウロとシラスとを、夜の間にベレアへ送り出した。ふたりはベレアに到着すると、ユダヤ人の会堂に行った。

ピリ 4:15 （口語訳）

4:15 ピリピの人たちよ。あなたがたも知っているとおおり、わたしが福音を宣伝し始めたころ、マケドニアから出かけて行った時、物のやりとりをしてわたしの働きに参加した教会は、あなたがたのほかには全く無かった。

使徒 16:13～15 （口語訳）

16:13 ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川の

て、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。

16:14 ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。

16:15 そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

使徒 9:16 (新共同訳)

9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

ほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。

16:14 ところが、ティアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた。

16:15 そして、この婦人もその家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女は「もし、わたしを主を信じる者と思いでしたら、どうぞ、わたしの家に来て泊まって下さい」と懇望し、しいてわたしたちをつれて行った。

使徒 9:16 (口語訳)

9:16 わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう。」

水曜日 12月31日 パウロとコロサイ

パウロがコロサイを訪れたという記録はありませんが、そのことはまた、彼の伝道戦略の効果の高さを物語っています。まず、コロサイに福音を伝えたのは、コロサイの住民であったエパfras(コロ4:12)でした。では、彼はどのようにして改宗したのでしょうか。最も可能性が高いのは、50年代半ば、パウロが近くのエフェソ(エペソ)に滞在し、「アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった」〔口語訳「アジアに住んでいる者は、ユダヤ人もギリシヤ人も皆、主の言を聞いた」〕(使徒19:10、同20:31と比較)ときです。

黙示録は、福音がいかにかこの地域全体に広まったかを証言しています(黙1:4)。コロサイへ福音が広がったことを含め、この成功の最も納得のいく説明は、小アジアで最も重要な都市であり主要な港であったエフェソ(エペソ)で最初にメッセージを聞いた、パウロの改宗者たちの働きによるものだというものです。エパfrasはエフェソ(エペソ)でパウロの説教を聞き、パウロの共労者の1人となって故郷のコロサイに福音を伝えたのです。

ラオディキア(ラオデキヤ)の南東約15キロにあるこの都市は、現在、発掘調査が行われている最中なので、この地域のほかの主要都市に比べるとわかっていることは多くありません。ただし、この都市にはかなりのユダヤ人が住んでおり、「フリギア州のその地域には1万人ものユダヤ人が住んでいた」(アーサー・G・パツィア『新国際聖書注解—エフェソの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙、フィレモンへの手紙』第10巻 3ページ、英文)ことはわかっています。コロサイで鑄造された貨幣は、多くのローマの都市と同様に、そこに住む人々がさまざまな神々を礼拝していたことを示しています。異教の慣習と強い文化的影響力は、明らかに、その都市のク

リスチャンたちに、そこで福音を伝えることにおいても、福音の純粋な信仰に忠実であり続けることにおいても、大きな課題となったことは明らかです。コロサイで名の知れたもう1人のリスチャンがフィレモン(ピレモン)でした。彼は、エパfrasとほぼ同時期に改宗したと思われます。

問4 フィレモン(ピレモン) 15、16 を読んでください(コロ 4:9 も参照)。パウロはフィレモン(ピレモン) に、オネシモをどう扱うべきか、いかに優しく勧めましたか。

ローマ法では、パウロはオネシモをフィレモン(ピレモン)に返す義務がありました。しかし、パウロは仲間の信者としてフィレモン(ピレモン)の心と良心に訴え、オネシモを奴隷としてではなく、兄弟として扱うように勧めています(フィレ[ピレ]16)。

【参考】英語テキストにある文

However much we detest the idea of slavery in any form, and wish that Paul would have condemned the practice, how do we come to terms with what Paul says here? (How fascinating that, during slavery in the United States, Ellen G. White specifically told Adventists to defy the law that ordered people to return escaped slaves.)

私たちはどんな形態の奴隷制にも嫌悪感を抱き、パウロがその慣行を非難していたらよかったのにと思いますが、パウロがここで述べていることを、私たちはどう受け止めればよいのでしょうか。(アメリカ合衆国で奴隷制が敷かれていた時代に、エレン・G・ホワイトがアドベンチスト教徒に対し、逃亡した奴隷を返還するよう命じる法律に従わないよう明確に指示していたというのは、実に興味深いことです。)

8

コロ 4:12 (新共同訳)

4:12 あなたがたの一人、キリスト・イエスの僕エパfrasが、あなたがたによりしくと言っています。彼は、あなたがたが完全な者となり、神の御心をすべて確信しているようにと、いつもあなたがたのために熱心に祈っています。

使徒 19:10 (新共同訳)

19:10 このようなことが二年も続いたので、アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった。

使徒 20:31 (新共同訳)

20:31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。

フィレ 15、16 (新共同訳)

15 恐らく彼がしばらくあなたのもとから

コロ 4:12 (口語訳)

4:12 あなたがたのうちのひとり、キリスト・イエスの僕エパfrasから、よろしく。彼はいつも、祈のうちにあなたがたを覚え、あなたがたが全き人となり、神の御旨をことごとく確信して立つようにと、熱心に祈っている。

使徒 19:10 (口語訳)

19:10 それが二年間も続いたので、アジアに住んでいる者は、ユダヤ人もギリシア人も皆、主の言を聞いた。

使徒 20:31 (口語訳)

20:31 だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。

ピレ 15、16 (口語訳)

15 彼がしばらくの間あなたから離れてい

引き離されていたのは、あなたが彼をいつまでも自分のものに置くためであったかもしれません。

16 その場合、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、つまり愛する兄弟としてです。オネシモは特にわたしにとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、一人の人間としても、主を信じる者としても、愛する兄弟であるはずで

コロ 4:9 (新共同訳)

4:9 また、あなたがたの一人、忠実な愛する兄弟オネシモと一緒に行かれます。彼らは、こちらの事情をすべて知らせるでしょう。

たのは、あなたが彼をいつまでも留めておくためであったかも知れない。

16 しかも、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟としてである。とりわけ、わたしにとってそうであるが、ましてあなたにとっては、肉においても、主にあっても、それ以上であろう。

コロ 4:9 (口語訳)

4:9 あなたがたのひとり、忠実な愛する兄弟オネシモをも、彼と共に送る。彼らはあなたがたに、こちらのいっさいの事情を知らせるであろう。

木曜日 1月1日 フィリピ(ピリピ)とコロサイの教会

問5 フィリピ (ピリピ) 1:1~3 とコロサイ 1:1,2 を読んでください。フィリピ (ピリピ) とコロサイの教会は、どのように描写されていますか。また、その描写には、どのような意味があるでしょうか。

パウロの書簡における典型的な挨拶は、宛先地のクリスチャンを「聖なる者たち」〔口語訳「聖徒たち」〕と呼んでいることです。彼らはバプテスマによって神の特別な民として区別されていました。イスラエルの民が割礼を受けることで(出19:5、6、1ペト2:9、10と比較)「聖なる国民」として区別されたのと同じです(ローマ教会が人々を「聖人」として列聖する習わしとはまったく無関係)。

また、興味深いことは、これら二つの書簡の挨拶が類似している点です。パウロは、フィリピの信徒への手紙(ピリピ人への手紙)では、「監督たちと奉仕者たち」〔口語訳「監督たちと執事たち」〕(フィリ〔ピリ〕1:1)に、コロサイの信徒への手紙(コロサイ人への手紙)では、「キリストに結ばれている忠実な兄弟たち」〔口語訳「キリストにある……忠実な兄弟たち」〕(コロ1:2)に言及しています。新約聖書が「忠実な兄弟たち」と語るとき、教会で特定の職務を担っている人々を意味します(エフェ〔エペ〕6:21、コロ4:7、1ペト5:12参照)。つまりパウロは、これらの都市の教会員だけでなく、教会指導者たちにも話しかけているようです。ほかの箇所でも、より具体的に説明されている役職への言及は(例えば、1テモ3:1~12、テト1:5~9)、教会の初期から組織がすでに存在したこととその重要性を証しています。

テモテやエパfrasのような共労者を訓練し、地域の教会の指導者を養成することは、パウロにとって優先事項であり、彼の伝道活動を前進させるものでした。言い換えれば、伝道と維持の両方に戦略的な取り組みがなされていたのです。1850年代の『レビュー・アンド・ヘラルド』誌の多くの記事が示すように、私たちアド

ベンチストの開拓者たちは、新約聖書の教会組織のモデルに従っていました。実際、ジェームズ・ホワイトはこう言っています。「新約聖書の神の秩序は、キリストの教会を組織するのに十分である。さらに必要なら、それは靈感によって与えられたであろう」(『福音の秩序』『アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド』1853年12月6日号173ページ、英文)。パウロがこれらの教会に手紙を書き送るずっと前から、使徒たちはすでにエルサレム教会の役員を任命していました(使徒6:1〜6、11:30参照)。それは、「真理の使者が改宗者を福音に導くところではどこでも、教会組織の型となるべきであった」(『希望への光』1390ページ、『患難から栄光へ』第9章)からです。

パウロが書簡を書く際、時々口述筆記者を用いていたことはよく知られています。パウロが「私たち」ではなく「私」という言葉を使用しているという事実は、これらの書簡の背後に彼の権威が存在していることを示しています。

9

フィリ 1:1〜3 (新共同訳)

1:1 キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。

1:2 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

1:3 わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、

コロ 1:1、2 (新共同訳)

1:1 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと兄弟テモテから、

1:2 コロサイにいる聖なる者たち、キリストに結ばれている忠実な兄弟たちへ。わたしたちの父である神からの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

出 19:5、6 (新共同訳)

19:5 今、もしわたしの声に聞き従い/わたしの契約を守るならば/あなたたちはすべての民の間にあって/わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。

19:6 あなたたちは、わたしにとって/祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

Iペト 2:9、10 (新共同訳)

2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたが

ピリ 1:1〜3 (口語訳)

1:1 キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。

1:2 わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

1:3 わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、

コロ 1:1、2 (口語訳)

1:1 神の御旨によるキリスト・イエスの使徒パウロと兄弟テモテから、

1:2 コロサイにいる、キリストにある聖徒たち、忠実な兄弟たちへ。わたしたちの父なる神から、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

出 19:5、6 (口語訳)

19:5 それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。

19:6 あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう。これがあなたのイスラエルの人々に語るべき言葉である。」

Iペテ 2:9、10 (口語訳)

2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚

たを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

2:10 あなたがたは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」/のです。

エフェ 6:21 (新共同訳)

6:21 わたしがどういう様子でいるか、また、何をしているか、あなたがたにも知ってもらうために、ティキコがすべて話すことでしょう。彼は主に結ばれた、愛する兄弟であり、忠実に仕える者です。

コロ 4:7 (新共同訳)

4:7 わたしの様子については、ティキコがすべてを話すことでしょう。彼は主に結ばれた、愛する兄弟、忠実に仕える者、仲間の僕です。

1ペト 5:12 (新共同訳)

5:12 わたしは、忠実な兄弟と認めているシルワノによって、あなたがたにこのように短く手紙を書き、勧告をし、これこそ神のまことの恵みであることを証しました。この恵みにしっかり踏みとどまりなさい。

1テモ 3:1~12 (新共同訳)

3:1 この言葉は真実です。「監督の職を求める人がいれば、その人は良い仕事を望んでいる。」

3:2 だから、監督は、非のうちどころがなく、一人の妻の夫であり、節制し、分別があり、礼儀正しく、客を親切にもてなし、よく教えることができなければなりません。

3:3 また、酒におぼれず、乱暴でなく、寛容で、争いを好まず、金銭に執着せず、

3:4 自分の家庭をよく治め、常に品位を保って子供たちを従順な者に育てている人でなければなりません。

3:5 自分の家庭を治めることを知らない者に、どうして神の教会の世話ができるのでしょうか。

3:6 監督は、信仰に入って間もない人ではいけません。それでは高慢になって悪魔と同じ裁きを受けかねないからです。

3:7 更に、監督は、教会以外の人々からも良い評判を得ている人でなければなりません。

くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。

2:10 あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている。

エペ 6:21 (口語訳)

6:21 わたしがどういう様子か、何をしているかを、あなたがたに知ってもらうために、主にあって忠実に仕えている愛する兄弟ティキコが、いっさいの事を報告するであろう。

コロ 4:7 (口語訳)

4:7 わたしの様子については、主にあって共に僕であり、また忠実に仕えている愛する兄弟ティキコが、あなたがたにいっさいのことを報告するであろう。

1ペテ 5:12 (口語訳)

5:12 わたしは、忠実な兄弟として信頼しているシルワノの手によって、この短い手紙をあなたがたにおくり、勧めをし、また、これが神のまことの恵みであることをあかしした。この恵みのうちに、かたく立っていなさい。

1テモ 3:1~12 (口語訳)

3:1 もし人が監督の職を望むなら、それは良い仕事を願うことである」とは正しい言葉である。

3:2 さて、監督は、非難のない人で、ひとりの妻の夫であり、自らを制し、慎み深く、礼儀正しく、旅人をもてなし、よく教えることができ、

3:3 酒を好まず、乱暴でなく、寛容であって、人と争わず、金に淡泊で、

3:4 自分の家をよく治め、謹厳であって、子供たちを従順な者に育てている人でなければならない。

3:5 自分の家を治めることも心得ていない人が、どうして神の教会を預かることができるだろうか。

3:6 彼はまた、信者になって間もないものであってはならない。そうであると、高慢になって、悪魔と同じ審判を受けるかも知れない。

3:7 さらにまた、教会外の人々にもよく思われている人でなければならない。そ

せん。そうでなければ、中傷され、悪魔の罠に陥りかねないからです。

3:8 同じように、奉仕者たちも品位のある人でなければなりません。二枚舌を使わず、大酒を飲まず、恥ずべき利益をむさぼらず、

3:9 清い良心の中に信仰の秘められた真理を持っている人でなければなりません。

3:10 この人々もまず審査を受けるべきです。その上で、非難される点がなければ、奉仕者の務めに就かせなさい。

3:11 婦人の奉仕者たちも同じように品位のある人でなければなりません。中傷せず、節制し、あらゆる点で忠実な人でなければなりません。

3:12 奉仕者は一人の妻の夫で、子供たちと自分の家庭をよく治める人でなければなりません。

テト 1:5~9 (新共同訳)

1:5 あなたをクレタに残してきたのは、わたしが指示しておいたように、残っている仕事を整理し、町ごとに長老たちを立ててもらうためです。

1:6 長老は、非難される点がなく、一人の妻の夫であり、その子供たちも信者であって、放蕩を責められたり、不従順であったりしてはなりません。

1:7 監督は神から任命された管理者であるので、非難される点があってはならないです。わがままでなく、すぐに怒らず、酒におぼれず、乱暴でなく、恥ずべき利益をむさぼらず、

1:8 かえて、客を親切にもてなし、善を愛し、分別があり、正しく、清く、自分を制し、

1:9 教えに適う信頼すべき言葉をしっかり守る人でなければなりません。そうでないと、健全な教えに従って勧めたり、反対者の主張を論破したりすることもできませんでしょう。

使徒 6:1~6 (新共同訳)

6:1 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。

うでないと、そしりを受け、悪魔のわなにかかるであろう。

3:8 それと同様に、執事も謹厳であって、二枚舌を使わず、大酒を飲まず、利をむさぼらず、

3:9 きよい良心をもって、信仰の奥義を保っていないなければならない。

3:10 彼らはまず調べられて、不都合なことがなかったなら、それから執事の職につかすべきである。

3:11 女たちも、同様に謹厳で、他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実でなければならない。

3:12 執事はひとりの妻の夫であって、子供と自分の家とをよく治める者でなければならない。

テト 1:5~9 (口語訳)

1:5 あなたをクレタにおいてきたのは、わたしがあなたに命じておいたように、そこにし残してあることを整理してもらい、また、町々に長老を立ててもらうためにほかならない。

1:6 長老は、責められる点がなく、ひとりの妻の夫であって、その子たちも不品行のうわさをたてられず、親不孝をしない信者でなくてはならない。

1:7 監督たる者は、神に仕える者として、責められる点がなく、わがままでなく、軽々しく怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、

1:8 かえて、旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する者であり、

1:9 教にかかった信頼すべき言葉を守る人でなければならない。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤りを指摘することができるためである。

使徒 6:1~6 (口語訳)

6:1 そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた。

6:2 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。

6:3 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。

6:4 わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」

6:5 一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンテオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、

6:6 使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。

使徒 11:30 (新共同訳)

11:30 そして、それを実行し、バルナバとサウロに託して長老たちに届けた。

6:2 そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろくない。

6:3 そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、

6:4 わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」。

6:5 この提案は会衆一同の賛成するところとなった。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、それからピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、およびアンテオケの改宗者ニコラオを選び出して、

6:6 使徒たちの前に立たせた。すると、使徒たちは祈って手を彼らの上においた。

使徒 11:30 (口語訳)

11:30 そして、それをバルナバとサウロとの手に託して、長老たちに送りどけた。

金曜日 1月2日 さらなる研究

「神は、霊の聖めと真理に対する信仰によって、あなたがたを救いに選んでくださった。だから、堅く立ちなさい。……神に忠実に仕えるなら、偏見や反対に遭うだろう。しかし、不当に苦しめられても、腹を立ててはいけな。報復してもいけない。イエス・キリストにあって、あなたの誠実さを強く保ちなさい。あなたの顔を火打ち石(硬い石)のように天に向けなさい。他人には好きなことを語らせ、好きに行動させなさい。あなたはキリストの柔和と謙遜において前進するのだ。神の御腕に頼りながら、確固とした目的と純粋な心を持ち、全身全霊を傾けて、あなたの働きを行いなさい。あなたの働きの真の崇高な性質を、あなたはわからないかもしれない。あなたの存在の価値は、あなたを救うためにささげられた命によってのみ量ることができるのである。……

キリストに向かって成長しているすべての魂には、真剣で長く続く闘いの時があるだろう。闇の勢力は、前進の道を阻もうと決意しているからだ。しかし、私たちがキリストの十字架に恵みを求めるなら、失敗することはない。救い主は、『わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにしない』、『わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる』と約束されたのだから」(『ユース・インストラクター』1899年11月9日号、英文)。

【参考】 —Ellen G. White, in *The Youth's Instructor*, Nov. 9, 1899.

“God has chosen you to salvation through sanctification of the spirit and belief of the truth. Therefore stand fast. . . . If you serve God faithfully, you will meet with prejudice and opposition; but do not become provoked when you suffer wrongfully. Do not retaliate. Hold fast your integrity in Jesus Christ. Set your face as a flint heavenward. Let others speak their own words, and pursue their own course of action; it is for you to press on in the meekness and lowliness of Christ. Do your work with steadfast purpose, with purity of heart, with all your might and strength, leaning on the arm of God. The true and exalted nature of your work you may never know. The value of your being you can measure only by the life given to save you. . . .

“For every soul who is growing up into Christ there will be times of earnest and long-continued struggle; for the powers of darkness are determined to oppose the way of advance. But when we look to the cross of Christ for grace, we cannot fail. The promise of the Redeemer is, ‘I will never leave thee nor forsake thee.’ ‘I am with you always, even unto the end of the world.’ ”

話し合いのための質問

- ① パウロは何度も投獄されましたが、それはいつも不当なものでした。不当な扱いを受けたとき、あなたはどうか反応しますか。そのような時に心の支えとなる聖書の約束を、いくつか挙げてみてください。
- ② キリスト教徒の迫害について、初期の教会指導者テルトゥリアヌスは、こう言いました。「あなたがたがわれわれを刈り取れば取るほど、われわれの数は増える——キリスト教徒の血は種である」(アレクサンダー・ロバーツ&ジェームズ・ドナルドソン編『ニカイア以前の教父たち』第3巻 55 ページ、英文)。一方で、場所や時代によっては、迫害が教会の働きを大いに妨げてきました。信仰のために迫害を受けている人々を、私たちはいかに支援できるでしょうか。
- ③ パウロが経験した苦難を踏まえて、今週の暗唱聖句について考えてください。「いつも(常に)喜びなさい」とは、どういう意味でしょうか。愛する人が病気になるったり、亡くなったりしたとき、あなたが仕事を失ったり、ひどい肉体的苦痛を感じるときにも、喜ぶことはできるのでしょうか。おそらく、このことを理解する鍵は、「何をいつも喜ぶのか」と自問することでしょう。つまり、どのような状況であっても、私たちは何をいつも喜ぶことができるのでしょうか。

10

フィリ 4:4 (新共同訳)

4:4 主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。

ピリ 4:4 (口語訳)

4:4 あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。